

ローマ人への手紙10章「信じるということ」

1A 知ること 1-13

1B キリストの行ない 1-4

2B 救いの近さ 5-11

3B 分け隔てのない召し 12-13

2A 従うこと 14-21

1B 宣教をする義務 14-15

2B 聞くことによる従順 16-21

ローマ人への手紙10章を開いてください。ここでのテーマは、「信仰のことば」です。

パウロは、9章から、イスラエルに焦点を当てて話しを進めています。神は、イスラエル民族に対して祝福を約束されてきました。けれども、イスラエルの多くの者が福音を受け入れず、逆に異邦人の多くが福音を受け入れています。それでは、神のご計画は無効になったのか、という疑問を抱きますが、決してそんなことはない、とパウロは言いました。ユダヤ人の多くが福音を受け入れないのは、むしろ神の約束があるからだと論じています。血肉によるユダヤ人だからといって、自動的に救われるのではありません。そして、選びがあります。ユダヤ人と言えども選ばれた者だけが救いにあずかっているのだ、と論じました。そして、神の主権がそこにはあり、もっぱら神の憐れみによって救われています。そして頑なにされる者もいるのだ、ということです。さらに、パウロはその憐れみの器として異邦人も選ばれたことを論じました。

このように、神の主権や選びによるご計画を私たちは知っていく必要がありますね。そして、今日学ばなければいけないのは、その主権と選びがあると同時に、神のご計画は信じる者に対する救いによって実現していつていることを見ていきます。既に9章の最後の部分において、異邦人の多くが義を得ることができ、イスラエル人が義を追い求めていたのに、得ることができなかったという皮肉、逆説を語っています。私たちも時々悩みませんか、ある人は大して真面目に神を求めていたように思えないのに、救いの喜びを手に入れているのに対して、他の人はキリスト者に囲まれ、多くの聖書の学びをしているのに、それでも信仰に至らないという例を見ている。ユダヤ人こそが、神に選ばれ、神に愛され、神の知識を得ていたのですから、彼らこそが義に到達すべきなのです。ところが彼らが到達できませんでした。

そこには、「キリスト」というお方がいるからですね。自分が義を追い求めている中で、自分の行ないによって到達しようという思いがあるのです。しかし、キリストに面する時に、その思いは粉々に砕かれます。行ないによって義を求めていたパリサイ人や律法学者に対して、その偽善をイエス様はこれまでもかというばかりに、暴かれました。しかし、義を追い求めない人たちは、キリストが自分のために行われたことに目を留めることができたのです。そこにある神の義に目を留めた

のです。キリストが自分の罪のために身代わりになされたこと、そしてそれがその通りであることを明らかにするために復活されたことを見ました。それで信じて、救われたのです。義を得たのです。だから、キリストはある人にとっては救いの岩なのですが、他の人々にとっては躓きの岩なのです。

そこで 10 章において、パウロは「信じる」ということについて、さらに突っ込んで話しています。私たちは、信じるとはどういうことなのか？についてしっかりと学べたらと思います。実は、この日本語「信じる」というのが厄介なのです。「信じたら、天国に行ける」と聞いて、「では、信じます。」と言ったら、それは信じたことになるのでしょうか？いいえ、「何か行なえば、天国という祝福にあずかれるんですよ。」という、「行ないによる義」をこれはまさに求めているのです。信じるとは、徹頭徹尾、「キリストが行なわれたことに対して、それを聞いて、心で受け入れて、また心で決める。」ことに他なりません。キリストによって現わされた神の愛を自分のものとすることです。差し出されたラブレターをしっかりと心に受けとめることです。ですので、ここの「信じる」ということを知る必要がありますし、それに関連して、「伝えていく」あるいは「宣べ伝える」ことについても学びます。

1A 知ること 1-13

1B キリストの行ない 1-4

1 兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。

パウロは、ユダヤ人が義に到達できないという事実ばかりを話しているので、パウロがユダヤ人を神によって罪の中に定めたいのか？という印象を持たれてしまいます。既に、そのように思っていた人たちがいたのでしょう。それでパウロは、ここで「私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。」と言っています。9 章でも冒頭で、「彼らのためであれば、自分が呪われてもよい」とまで言いました。

私たちにも、このような葛藤があるでしょう。できるものなら、自分の愛している人に対して、「あなたは救われている」と言いたいのです。仏を信じていても、救われますね？と尋ねられて、「そうですよ、救われているんですよ。」なんて言えればいいと願っています。けれども、そうではないことを知っていますから、それで「あなたは、そのままでは救われません。」と断言せざるを得ないのです。ですから、パウロのようになります。しかし、もちろん心の願い、祈りは救われることです。

2 私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。

熱心であるが問題は知識がなかったことである、とパウロは言っています。宗教的なユダヤ人ほど、神に対して熱心な人たちはいません。その神への献身は本当に驚きます。けれども以外に、日本の人たちは、一度、規則が与えられたらできるかもしれませんね。朝に決まった時間に起きな

さい。そして祈りの時間を一時間持ちなさい。聖書を3章ずつ読みなさい。そして礼拝は欠かさずに。伝道もしてね。それで、あなたは神に良しと言われますよ。神に好意を持たれますからね。などとと言われてたら、意外にできてしまうかもしれません。

そのように真面目であれば、神に受け入れられると言ってあげればどんなに良いことかと思いますが、残念ながら受け入れられないのです。それは正しい知識ではないのですね。ここで大事なものは、「いくら誠実であり熱心が救われることを保障するものではない。」ということです。ある意味で、熱心であることによって心がますます頑なになり、神の御心に反対してさえいることもあるのです。自分のあり方を否定されたら、とてつもなく怒り、相手に攻撃的にさえなることも考えられます。それが、ユダヤ教徒たちに起こっていたことです。パウロは、自分自身がそうであったことを証しています。ピリピ人への手紙において、「その熱心は教会を迫害したほどで」あったと言っているし(3:6)。けれどもそれは、「信じていないときに知らないでしたこと」だったと、テモテへの第一の手紙で書いています(1:13)。知識に基づく熱心ではなかったのです。そして、熱心さのゆえにむしろ、神の御心に真っ向から対立することを主は語っておられました。「事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。(ヨハネ 16:2)」

彼らには聖書についての知識は、とてつもなく沢山ありました。正統派ユダヤ教のラビは、十代のうちに旧約聖書すべてを一字残らず暗記していると言われていています。いわゆる知識が不足しているわけではありません。そうではなく、信仰によって義に達するという知識がなかったのです。

多くの人が、「人は誠実であれば天国に行けるのではないか？」と言います。けれども、誠実であればあるほど、大きな間違いを犯していることもあるのです。誠実に間違えているのです。例えば戦場で、敵だと思って一生懸命、銃を打っていたら実は味方であった、ということがあります。いい加減なほうが被害は少ないのです。これは本当の話ですが、雪嵐が吹き荒れて、フットボールの味方のゴールにボールを入れてしまったチームの話もあります。誠実であればあるほど、その結果は絶望的なのです。

3 というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。

彼らが知らなかったこと、無知であったことは、ここです。義というのは、自分自身の義によって達成するものではない、という知識です。聖書が、神が正しい方、神の真理のまっすぐな姿が啓示されている書物であることを知らなかったということです。聖書は、まず神ありきの物語を貫いています。神がおり、神がまず事を成し遂げ、それから人間が応答している歴史を描いています。「初めに、神は天地を創造された。」とあります。そして人が神のなされる恵みの業に対して、へりくだって、感謝して、応答することによって、神がその人と共におられ、共に生きてくださるのです。その逆ではありません。人が何かを行なって、それに神が反応されるわけではありません。人間中心

ではなく神中心の世界なのです。

これが人間全ての抱えている問題なのです。まず、自分自身が正しいかどうかの吟味を行います。そして、いくら「そうではないのですよ、罪というのは、まさにあなたを造られた神がおられるのに、それに目を留めないで、自分のことを考えていることなのです。神ご自身に目を向けて、神がキリストにあって成し遂げてくださったことに振り向いてください。」と懇願しても、やはり自分自身のことを考えているのです。これが、9章でパウロが話した「つまずきの石」なのです。前進しようとしても、いつもその石につまずいて転んでしまうのです。

4 キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。

キリストが律法を終わらせた、という訳は若干、語弊があります。律法が無くなったということではありません。そうではなく、キリストこそが律法の目標だということです。3章の最後にも、「かえって、律法を確立することになるのです。(31節)」とありました。主は言われました。「マタイ 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」イエス様が律法を成就するために来られたのです。律法に示されている神の聖と義を行なわれ、そして律法に示されている罪を犯した時の贖いを成し遂げられました。律法を違反した者が呪われるという、その呪いも受けられたのです。ですから、自分が肉に弱さによって行なえなくなっている律法の要求が、キリストがご自分の肉体で罰によって受けてくださった、ということを知り、それを信じ受け入れることをしなさい、と言われているのです。キリストを信頼しなさい、と言っています。そして神はその者を受け入れ、救ってくださるのです。

2B 救いの近さ 5-11

5 モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いています。6 しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言っははいけない。」それはキリストを引き降ろすことです。7 また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言っははいけない。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。8 では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。

ここから、「信仰のことば」についてパウロは説明していきます。信仰とは何か？ということです。5節にある、「律法による義を行なう人は、その義によって生きる」は、レビ記 18章 5節にあるものですが、律法は、その行なうことによって命を得ることを教えています。しかし、キリスト者はそのようには生きません。キリスト者は、キリストがしてくださったこと、また復活して今も生きておられるキリストに信頼して、この方のそばに居ること、つまり信仰によって命につながっています。「あれこれをして、それで生きる」のではないのです。

では、「信仰による義」はどうなるのか？彼は、申命記 30 章 12-13 節にあります。これも律法なのですが、律法の中に実は、人が生きることができるのは、自分の行ないではなく、神の言葉を信じる信仰によって生きることが律法の中に示されているのです。申命記 30 章 11-14 節を読んでみましょう。

30:11 まことに、私が、きょう、あなたに命じるこの命令は、あなたにとってむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。30:12 これは天にあるのではないから、「だれが、私たちのために天に上り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。30:13 また、これは海のかなたにあるのではないから、「だれが、私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。30:14 まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあつて、あなたはこれを行なうことができる。

パウロは、モーセが語った言葉から続けて引用しています。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。」というのは、キリストが既に行なわれました。天にキリストが既におられて、それでこの地上に降りてきてくださったのですから、誰かが天に上がる必要はないのだ、ということです。また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。」というのは、地の奥底、あるいは海の底にいて聞いて来ないといけないのではないかと、という問いかけですが、イエス様は、既に陰府に下り、それから甦ってくださったのです。ですから、これもキリストが既に行なわれました。

このことは、多くの人が思うことですね。何か大それたことをしなければ、神の義に到達できないのでは？という思いがどこかでします。しなければいけないことは、それほど多くない、いや一つだけであると主がマルタに語られましたが、そのことがどうしても分かりません。「そんな容易く、救いが得られてはいけない。」という思いがどこかにあり、それで自分自身に何かを課そうとします。しかし、信仰の言葉はそうではありません。

それでは、何をしなければいけないかと言うと、信仰のことば聞いて、信じることです。ここの「ことば」とは「レーマ」というギリシヤ語であり、語られることばのことを指しています。書かれているロゴスという言葉とは区別されています。書かれてある言葉ではなく、自分で聞いて、その聞いたことばを、心に受け入れて、信じるという行為だけなのです。そこでモーセは、「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」と言っています。ですから、私たちは神の言葉を語り、そしてそれを聞くという福音宣教、また御言葉の教えを教会の務めとして重んじているのはそのためです。それは 14 節以降に詳しく書かれています。

9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。10 人は心に信じて義と認められ、

口で告白して救われるのです。

パウロが、モーセの言っている、「口によって、心によって」という言葉に呼応して、「あなたの口でイエスを主と告白」、そして、「あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じる」と言っています。ここで、9 節にある「心で信じる」ということ、そして「口で告白」というところに注目してみたいと思います。

心で信じるとは、「聞いていることに、心を従わせる」と言ったらよいでしょう。「信じさえすればいいのよ。」と伝道を受けた時に、急かされたことを思い出せる人が多いと思います。信じると言っても、心が付いてきていないのです！信じるとは、信じていると心に思い込ませることではありません。信じているという心理状態を作ることではありません。それは、キリスト教の信仰ではありません。思い込ませたところで、心では別のことを考えていますから。ここでは、「悔い改める」という他の大切な行為が必要になります。悔い改める、とは、「思いを変える」ことです。キリストが自分の罪のために死なれたのだ、また三日目に甦られたのだ。だから、この方を自分を罪から救う方として信頼して、自分の人生をこの方に任せなさいという福音の言葉を聞きます。これらの聞いた言葉に対して、自分は静かに、「そうだ。その通りだ。私の身をこの方にゆだねよう。」と思いを変えるのです。ですから、信じるとは、聞いていることによって思いを変えて、それで心を従わせることに他なりません。神の愛に応答すると言ってもよいでしょう。心から受け入れる、と言ってもいいです。

そして、「口で告白する」ということも、「ただ信じればいいのよ」というように、呪文のように急かされることがあります。その意味は全く違います。もしただ、口でイエスは主であると言うことが大事なのであれば、唱えるという行ないによる救いになってしまいます。口で告白するとは、「神に対して、また人前で認める。」ということです。イエス様が言われました。「マタイ 10:32-33 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」心に受け入れたことを、口によって言い表します。そして、それが人前であっても、同じように言い表します。

そしてその中身ですが第一に、「イエスを主」と告白します。イエス・キリストを、自分の人生と生活の主として心にお迎えすることを口で言い表すことです。コリント第一 12 章 3 節には、「聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です。』と言うことはできません。」とあります。真に御霊によって新生した人は必ず、イエスを主にして生きていく方向性が与えられます。もし、その人の生活にその後、変化がなければ、その告白はただ口で唱えただけにしかすぎず、真実な告白ではなかったのでしょう。

そして、「あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じる」ことが必要になります。さらに詳しくは、コリント第一 15 章にあります。もちろん自分の罪のために主が

死んでくださったことも信じないといけません。「15:2-4 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、」私たちは、この福音の上に立っており、この言葉を保っており、この言葉によって生きています。

3B 分け隔てのない召し 12-13

ですから、必要なのは心で信じ、口で告白することです。そこで、パウロがこの手紙の始まりから話していることが浮き彫りにされます。それは、「広範囲に、信じる者全てが救われる」という真理です。

11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

キリストを信頼することにおいて、心で信じて、口で告白することにおいて、そこには差別がありません。ちょうど人間であれば、誰でも息をして、誰でも水を飲んで生きるように、この方に信頼するということについては、全ての人に平等に与えられた救いの条件です。

ですから、パウロは強調しています。「同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。」ユダヤ人のための神、異邦人のための神がいるわけではなく、同じ主です。すべての人の主です。そして、呼び求めるのであれば、誰に対しても恵み深くあられる、ということです。覚えていますか、ヨナ書において、アッシリヤの首都ニネベにおいて、彼らがユダヤ人に行った虐げは、とてつもないものであったにも関わらず、彼らが悔い改めて、行ないを改めようとして、主なる神に呼び求めたら、主は滅ぼすと言われたことを思い直されました。誰に対しても、呼び求める者には恵み深いのであります。

私たちが、誰に対してであっても、主が恵み深くあられ、その人を救いたいと願われていることを知ることはとても大切です。私たちは同じ興味や利害があると、それで集まってしまうがちです。そして、他の人々を受け入れない、心が開かれていないという傾向があります。そして、伝道と言いながら、伝道でさえが実はクリスチャン向けの言葉であったりします。私たちがいかに、主の心、恵み深い心を持っていられるのかどうか、が大切です。

ところで、13 節の言葉、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」であります。これはヨエルの預言からのものですが、「呼び求める」というのは、信じることからさらに一歩進んだ行

為ですね。「信じます」と言うのみであれば、何か他の人に言われたという受動的なものの可能性がありますが、「主イエス様！」と呼び求めるところには、さらに主に対して自分自身を明け渡している様子が見受けられます。

2A 従うこと 14-21

こうして私たちは、信じて、口で告白するところに救いの条件があることを見ましたが、ゆえに、私たちの働きというのが宣教になるのだというところを見ていきます。

1B 宣教をする義務 14-15

14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

今、「信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。」については説明しました。本気で信じているからこそ、呼び求めることができます。そして、「聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう」であります。これもその通りです。しばしば、「無言の証し」という言葉があります。行ないによって、知ってもらうという証しであります。確かに、それは主ご自身が、「ヨハネ 10:38 たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」と言われたように、わざを行なうことは大切です。けれども、もう一度繰り返しますと、救われるのは、心で信じて、口で告白するということが条件なのです。ですから、まず、聞くことが必要なのです。

そして、聞かせるためには、「宣べ伝える人」が必要になります。宣べ伝えるとは、「福音の言葉を運ぶ」と言ってもよいかもしれませんが。まだ聞いていない人のところまで行って、福音の言葉を配達しに行きます。そして、「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」とあります。宣べ伝える時には、必ず遣わされます。「この買い物行ってきて」といって使いに送るのと同じように、聖霊がある人に対して、「そこに行きなさい。」と命じられるのです。そして教会が聖霊による派遣を認知して、その人を送り出します。私たちの教会では、そこまでの整えがありません。誰かを福音の働きのために、どこかに遣わすというところには全然至っていません。けれども、ある意味で、全ての人々が福音宣教者であります。教会に集まり、聖霊の感動を受け、それで自分の置かれているところで福音を語れば、立派な福音宣教者であります。私たちは、遣わされるという意識、それから宣べ伝えるという使命を帯びていないといけない、ということです。

そして必ずしも、自分自身が宣教師になる必要はありません。しかし、宣教師を祈りと金銭によって支えることによって、その宣教の働きの一部になることができます。

そして、イザヤ書において既に福音宣教について書いてあります。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」であります。この背景は、バビロンが崩壊して、エルサレムに走って戻って行き、そして、バビロンの王ではなく「神が王となられた」という知らせを持ってきている足であります。あるアニメ動画で、その人の足が長距離を歩き、走って来たので、傷がたくさんできている姿を示していました。これは正しいでしょう。私たちが福音を運ぶということは、その歩みに傷が付きます。しかし、主はそれを「美しい」とみなしておられるのです。

2B 聞くことによる従順 16-21

16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」とイザヤは言っています。17 そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

パウロは、再び難しい課題を取り上げます。福音は伝えられているのに、全ての人は信じているわけではない、ということです。私たちは、人々が福音を拒むのを目撃する度に、心を痛めています。けれども、それは主ご自身がイザヤを通して語っておられたのです。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」と、彼らの知らせを多くが信じなかったことを述べているのです。

「福音に従った」とありますが、福音は従うものです。福音を聞いて、良いお話しでした、ということであれば、従ったわけではありません。それを聞いて、信じないといけないのです。思いを変えて、心からその言葉を聞いて、受け入れ、そして我が身を主ご自身に任せると言うことをして、初めて「福音に従った」ということになります。

そして、「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる」とあります。ここに御言葉を聞くことと、信じることの密接な関係があります。「聞いているけれども、聞いていない」という現象が起こります。聞いているけれども、信仰をもって聞いていない、信仰と聞いていることを結びつけていないという問題です。

一つは、「自分の行ないが先行していて、聞いていることを無視しているか、歪曲している」ということがあります。自分のしたいこと、しないといけないと思いこんでいることがあります。そして語っていることの意味合いや真意は A だとすると、勝手に、「B だと思って、やり始める。」ということがあります。これは、自分の目的のために聞いているのであり、自分自身の義を立てるようにして聞いていることです。

もう一つは、「漫然と聞いている」ということです。子守歌のように、聞こえてはいるけれども、聞いていません。ですから、何となく知識や情報は与えられていても、信仰の従順に結びついていません。たとえば、飛行機に乗ったとしましょう。離陸するときに、救命道具の使い方についての説明があります。乗客の多くの方は、聞いてはいますが必死に聞いているわけではありません。け

れども、実際に乱気流に巻き込まれて、機体が激しく揺れているとき、その機内放送の指示を、一語もさらず聞き入ろうとします。それが聞くことであり、キリストについてのみことばをそのように聞くので、行ないが生じるのです。

ここでの「聞く」は、「そうなんだ」と本当に信じて聞いていることです。この「みことば」というのが、先ほど話したレーマであります。信じて聞いていくと、それに自分がいつの間にか合わせています。必ず「従う」という要素が含まれます。自分で何かを行なっているという意識はとても少ないです。主から聞いてそうなったので、それは実は御霊によること、主の恵みによることなのです。

18 でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」

「彼ら」とは、イスラエル人のことです。イスラエル人の全てが信じている訳ではないという状況の中で、まずイザヤ書から、それは、神は既に知っておられたことなのだ、信じない者は多くいるということをパウロは教えました。そしてここでは、「もしかしたら、聞いていなかったのでは？」という疑問に対して、「いや、聞いていた」ということを反論するために書いています。これは詩篇からで、自然界に神の声が鳴り響いている箇所です。イスラエルは、福音の言葉を聞いていましたが、それを信じなかったのです。それ以前に、この詩篇の箇所にあるように、自然界の中でも神の声は聴いているのです。

実は主は声を出しておられるのに、「そんなの聞いていなかった」という人が多くいます。人というのは面白いもので、自分の耳に聞こえてくること、目で見えるものを選択しています。その眼中に入らなければ、見ていない、聞いていないということになるのです。霊的には、悪魔がキリストの栄光を見えないようにさせていると、コリント第二にあります。

19 でも、私はこう言いましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」20 またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現わした。」

イスラエル人は、聞いていただけでなく、知ってもいました。福音が何なのかを把握さえしていました。ところが信じないでいます。そして異邦人が受け入れているという現実を、主は既に申命記やイザヤ書の中で予め語っておられたのです。ご自分の民ではないのに、イスラエルの神を信じました。主が異邦人にご自身を現わしました。まさに、私たちがその異邦人たちです。

21 またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」

イスラエルは、このように福音に対して不従順なのですが、主は、一日中、手を差し伸べておられる、とあります。主は、イスラエルをこよなく愛しておられるのです。福音に対してかたくななのですが、何とかして彼らが救われることを願っておられます。

そこで、11章が始まります。神は、イスラエルを選んでおられ、彼らを救われることをパウロは話しています。9章も、イスラエルが救われていないことを悲しむことから始めましたし、10章も救われることを願っているという言葉で始めました。そして、11章は、神がイスラエルの民を決してお見捨てになっていないことから始めます。イスラエルに対する神の変わらない愛とあわれみを知るときに、私たちは、愛とは何なのか、アガペの愛は何であるかを知っていくことができます。

いかがでしょうか、これが今、神の救いのご計画の中で起こっていることです。そしてイスラエル人だけでなく私たち人間全般に当てはまります。信じることは簡単なのです。けれども、その簡単なことができないのが現状です。なぜなら、自分自身の義を求めようとしていること、そして、自分はキリストの神とは異なる文化、社会を持っていると思っていること、そして伝えられたことを聞いて信じるという従順を行っていないことが問題です。